

五重塔 幸田露伴

其 四

當時に有名の番匠川越の源太が受負ひて作りなしたる谷中感應寺の、何処に一つ批点を打つべきところ有らう筈なく、五十畳敷格天井の本堂、橋をあざむく長き廻廊、發部かの客殿、大和尚が居室、茶室、学徒所化の居るべきところ、庫裡、浴室、玄關まで、或は莊嚴を尽し或は堅固を極め、或は清らかに或は寂びて各々其宜しきに適ひ、結構少しも申し分なし。そも、微々たる旧基を振ひて簡程の大きを成せるは誰ぞ。法諱を聞けば其頃の三歳児も合掌礼拝すべきほど世に知られたる宇陀の朗圓上人とて、早くより身延の山に螢雪の苦学を積まれ、中ごろ六十余州に雲水の修行をかさね、毘婆舍那の三行に寂靜の慧劍を礪ぎ、四種の悉檀に濟度の法音を響かせられたる七十有余の老和尚、骨は俗界の掌櫃を避くるによつて鶴の如くに瘦せ、眼は人世の紛紜に厭きて半睡れるが如く、固より壞空の理を諦して意欲の火炎を胸に掲げらるゝこともなく、涅槃の真を会して執着の彩色に心を染まざるゝことも無ければ、堂塔を興し伽藍を立てんと望まれしにもあらざれど、徳を慕ひ風を仰いで寄り来る学徒のいど多くて、其等のものが雨露凌がんで便宜も旧のまゝにては無くなりしまゝ、猶少し堂の広くもあれかしなんぞ独語かれしが根となりて、道德高き上人の新に規模を大うして寺を建てんと云ひ玉

ふんど、此事八方に伝播れば、中には徒第の伶俐なるが自ら奮つて四方に馳せ感應寺建立に寄附を勧めて行くもあり、働き顔に上人の高徳を演べ説き聞かじ富豪を慫慂めて喜捨せしむる信徒もあり、さなきだに平素より随喜渴仰の思ひを運べるもの雲霞の如きに此勢をもつてしたれば、上諸侯より下町人まで先を争ひ財を投じて、我一番に福田へ種子を投じて後の世を安楽くせんと、富者は黄金白銀を貧者は百銅二百銅を分に応じて寄進せしにぞ、百川海に入るごとく瞬く間に金錢の驚かるゝほど集りけるが、それより世才に長けたるもの世話人となり用人なり、万事万端執り行うて頓て立派に成就しけるとは、聞いてさへ小氣味のよき話なり。〔中略〕

其二十三

蒼鷺の飛ぶ時他所視はなさず、鶴なら鶴の一点張りに雲をも穿ち風にも逆つて目ざす獲物の、咽喉仏把攫までは合点せざるものなり。十兵衛いよ／＼五重塔の工事するに定まつてより寐ても起きても其事三昧、朝の飯喫ふにも心の中では塔を噛み、夜の夢結ぶにも魂魄は九輪の頂を繞るほむなれば、況して仕事にかゝつては妻あることも忘れ果て兎のあることも忘れ果て、昨日の我を念頭に浮べもせず明日の我を想ひもなさず、唯一ト手斧ふりあげて木を伐るときは満身の力を其に籠め、一枚の図をひく時には一心の誠を其に注ぎ、五尺の身体こそ犬鳴き鶏歌ひ権兵衛が家に吉慶あれば木工右衛門が所に悲哀ある俗世に在りもすれ、精神は紛たる因縁に奪られて必死とばかり勤め励めば、前の夜源太

に面白からず思はれしことの氣にかゝらぬにはあらざれど、日頃のつせり益々長じて、既何処にか風吹きたりし位に自然軽う取り做し、頓ては頓と打ち忘れ、唯々仕事にのみ掛りしは愚懸なるだけ情に鈍くて、一条道より外へは駈けぬ老牛の茹に似たりけり。

金箔銀箔瑠璃真珠水精以上合せて五宝、丁子沈香白膠薰陸白檀以上合せて五香、其他五葉五穀まで備へて大土祖 神壇山彦神 壇山媛神あらゆる鎮護の神々を祭る地鎮の式もすみ、地曳土取故障なく、さて竜伏は其月の生氣の方より右旋りに次第据ゑ行き五星を祭り、新初めの大礼には鍛冶の道をば創められし天の目一箇の命、番匠の道闢かれし手置帆負の命彦狭知の命より思兼の命天 兎屋根の命太玉の命、木の神といふ句々延馳の神まで七神祭りて、其次の清純の礼も首尾よく済み、東方提頭頼咤持國天王、西方尾嚙又廣目天王、南方毘留勒又增長天、北方毘沙門多聞天王、四天にかたむる四方の柱千年万年動ぐなど祈り定むる柱立式、天星色星多願の玉女三神、貪狼巨門等北斗の七星を祭りて願ふ永久安護、順に柱の仮轄を三ツづつ打つて脇司に打ち緊めさする十兵衛は、幾千の苦心も此所まで運べば垢穢顔にも光の出るほど喜悅に氣の勇み立ち、動きなき下津盤根の太柱と式にて唱ふる古歌さへも、何とはなしにつくづく嬉しく、身を立つる世のためじどと其下の句を吟ずるにも莞爾しつゝ二度し、壇に向ふて礼拝恭み、拍手の音清く響かし一切成就の袂を終る此所の光景には引きかへて、源太が家の物淋しき。〔後略〕